

# 「海の防人として」

明石浦漁業協同組合  
代表理事組合長 戎本裕明

## 1 明石の漁業

兵庫県明石市は、「明石海峡」に面し、古来より漁業が盛んに行われてきました。その、明石海峡や、西に広がる播磨灘が私たちの主な漁場ですが、明石海峡の潮流によって、作り出された複雑な地形は、多くの産卵場・育成場をもたらし、日本有数の豊かな漁場が形成されています。特に、潮流によってできた広大な砂の浅瀬は、「鹿の瀬」と呼ばれ、先人達が大切に守ってきたお陰で、今も瀬戸内海最大のイカナゴの産卵・生息地となっています。

そして、明石海峡で育った魚は、豊富なエサを食べて育ち、速い潮流で自ずと鍛えられ身が引き締まります。これらによって質の良い事で知名度が高い「明石鯛」や「明石蛸」をはじめとし、四季折々に約 100 種類もの魚が水揚げされています。

また、兵庫県は全国有数のノリの産地であり、ノリ養殖業は本県瀬戸内の生産額の約 4 割近くを占める主要な漁業となっています。その中で明石は県内生産量の 4 割近くを占め、大変重要な地位を担っています。

## 2 私が子供の頃は

この瀬戸内海は、私が子供の頃は、高度経済成長に伴う埋立てと、また、工場などからの排水による汚染が進み、「瀬死の海」といわれました。このため、昭和 40 年代には、漁業者が有害物質や赤潮の大規模な発生などの「環境問題」を取り上げ、「海をきれいにしてほしい」と必死に訴えていたことを聞いています。

その結果、水質の規制に関する法律が作られるとともに、下水道整備も進み、そのお陰で海の水はきれいになっていきました。

これに伴うように、漁獲量も、ノリ養殖生産量も増加し、明石の浜は大変賑わってきました。

## 3 ノリ養殖

この当時の明石を含めた兵庫県のノリ養殖は、生産のピークが 3 月から 4 月で、この時期は 24 時間体制で、刈り取りと加工を行わなければ追いつかない状態でした。

ところが、10 年ほど前から、色落ちが頻発するようになりました。

ここ数年、漁期初めの 12 月は、まだ良質なノリが採れますが、1 月の下旬になると、色落ちが顕著になり、年々、発生する時期が早まっています。

そして本来、ピークを迎える 3 月になっても、色が戻らず、明石ノリそして兵庫ノリの特徴である黒々したノリが採れなくなってきたのです。

色落ちが起こり始めた当初、漁業者には、この原因がよく分かりませんでした。しかし、県漁連のり研究所や水産技術センターでの調査研究から、海中の溶存態窒素、つまり、ノリが必要とする栄養分が減ってきたことを知りました。

私自身、その時に初めて、「栄養塩」という言葉を知り、いかにノリ養殖にとって大切なものかが分かったのです。

それまでは、黒いノリが採れる海が、ごく当たり前であったということです。

今漁期は、昨年 9 月に台風や、長雨など、まとまった降雨があったので、栄養塩が潤沢な量で推移し、豊漁になるとみられていました。しかし、今年も、栄養塩が下がり、今現在、色が急速に落ちてきています。

こうした厳しい状況の中ではありますが、1 月後半から毎週のように、20mm 程度の

雨が3度降り、河川の流入量が増えたお陰で、その都度、色落ちは一時的ではありますが回復しています。実際、のり研究所等の調査では海域の窒素濃度も上がっていることから、河川からの栄養塩の供給の重要性を実感しています。

#### 4 底びき網漁業

一方で、漁船漁業に目を向けると、平成に入った頃から、徐々に魚が獲れなくなってきました。

当時、自分たちは、この原因が「漁業者による獲りすぎではないか」と考え、減船や、漁獲量の制限、週休2日制の導入といった自主規制に取り組んできました。また、稚魚や二枚貝の放流を行うなど、水産資源の保護や増殖を進めてきました。

このような漁業者の努力にも関わらず、目立った漁獲量の回復は見られず、特に3年前から急激な落ち込みを見せています。これは、明石だけのことではなく、兵庫県の瀬戸内海地域すべてに言えることです。

特に、カレイとか、ヒラメ、アナゴといった底物が減り、明石をはじめ、兵庫県で最も盛んな底びき網漁業の経営は、既に限界に達しています。そして、かつて明石の海を埋め尽くしたと言われる、ウチムラサキをはじめ、アサリやタイラギ等の二枚貝も全く獲れなくなりました。

#### 5 栄養塩の重要性

本県瀬戸内では、イカナゴは最も水揚げされる魚の一つであり、春を告げる魚として、なくてはならない重要な魚です。しかし、5、6年前から、船びき網漁業者の間では「イカナゴが太らない」という声が聞かれるようになってきました。現在、その原因の1つとして、イカナゴのエサが無くなっているのではないかと考えられています。

イカナゴのエサとなるのは、動物プランクトンです。その動物プランクトンのエサとなる植物プランクトンを支えているのは、ご存知のとおり、窒素やリンなどの栄養塩です。

つまり、ノリの色落ちも、魚の減少も、この栄養塩の減少に原因があると確信しています。

以上述べてきましたように、栄養塩の減少によって、海の生産力そのものが弱まり、「魚や貝が育ち、海藻が繁る豊かな海」は消えてしまいます。そして、瀬戸内海の新鮮な海の幸を消費者に届けることができなくなるのではと心配しています。

健全な海の生態系を維持するためには、まず、生物が生育するのに十分な栄養塩が必要です。

#### 6 砂の重要性

また、栄養塩に加えて生物の生息に必要なのが、砂です。先ほど話しましたイカナゴであっても、二枚貝であってもきれいな砂がないと育ちません。

しかし、最近、海の底から砂が無くなってきています。

以下の写真は、この2月12日にモニタリング調査をした際、たまたま撮影できた海底の様子です。

砂がほとんどなく、海底の粘土がむき出しになっている状況が確認できます。

本来、砂は山から川をとおして海に供給されるものですが、多くの川には「ダム」や「堰」が造られ、これらが砂をせき止め、海へ流れてきません。

兵庫県の千種川では、たまった砂を漁場造成に活用する取り組みが始まりましたが、ほとんどは、処分地などに運ばれてしまいます。

その砂を、海に運んでくることはできないのでしょうか？



写真1 砂がなく、粘土質の層が露出



写真2 貝が潜れないほど砂が少ない

## 7 意見と要望

当然、海は漁業者だけのものではないとはわかっています。

下水処理施設を整備し、海の汚濁を防ぐことは大切なこともわかっています。

しかし、その浄化処理技術は今や、海に必要な栄養分を取り除くレベルに到達しています。

また、利水や、治山・治水は人の命と暮らしを守る重要なことです。

しかし、ダムは海に必要な栄養塩や、砂の供給を断っています。

そこで、私が環境施策に望むのは、次の2点です。

- ① 栄養塩や砂が、川から海へ流れ、循環し、藻場や干潟に富んだ瀬戸内海が再生する仕組みづくりをすること。

しかしながら、今現在、漁業生産が、極めて厳しい状況に達していることから、

- ② それまでの間、下水処理施設において規制の範囲内で窒素排出量を緩和する社会的実験の実施など、早急な対策を講じること。

これらの実現のためには、所管も地域も広範囲にわたることから、関係省庁と府県は、十分に連携して取り組んでいただきたいと思います。

そして、瀬戸内海が未来永劫に豊かな海となるように願っています。

水産基本法において、漁業の役割は「国民への水産物の安定供給」と位置づけられています。

タイやタコ、イカナゴやサワラなど、瀬戸内海の新鮮でおいしい海の幸を食べたいという声に応えることが漁業者の使命だと思っています。

私は、おいしい魚を届けながら、漁業が将来においても家族を養い、子供を育てていける産業であって欲しいと願っています。

そのためにも、瀬戸内海を水産資源が豊富な海、すなわち「豊かな海」として再生されるよう、私たち漁業者が「海の防人」の役目を果たして参ります。